

東京国立博物館

特別公開

国宝 松林図屏風

9月23日(火)祝 ~ 11月3日(月)祝

筆の穂をいくつか重ねた連筆や、竹の先を細かく割いて筆にした竹筆を使って、松林を粗く大胆に描いたこの屏風は、後ずさりしてしまいそうな迫力をもっています。薄暗い展示場のなかでこの絵を数分間、じっと見つめていると、目が慣れてきて、ひっそりと松林が浮かび上がってきます。ほとんど人が静かに見入ってしまい、画面の

なかに引き込まれ、松林のなかに自分が立っているかのような感覚になるのではないのでしょうか。あるいは、屏風の前に立つ人も松の一本となって絵の風景の一部になっているかもしれせん。

墨の濃淡が、光の強弱を生み出すことによって、霧に包まれ、あらわれ消える松林の風情をみごとにあらわしています。霧の晴れ間から、雪山がのぞき、流れる空気は晩秋の冷たく湿った朝の空気を感じさせます。また、四つ

ほどのグループに描き分けられた松林は、木々の間を風がとおり抜けるように配置されています。またよく目を凝らして画面をみると、料紙に漉き込まれた細かい葉が、風にふかれて舞う松葉のようにもみえます。そして画面は、松の根元を明るくして、上空の墨を濃くしている

ので、ようやく朝日が出た瞬間をあらわしているようです。霧の晴れ間にゆるやかな冷たい風の中で、木漏れ日のやわらかな光の粒子が降り注いでいます。

この松林は、観る人によっては、三保の松原にみえるかもしれませんし、あるいは天橋立の松林にみえるかもしれ



国宝『松林図屏風』(部分) 6曲1双 長谷川等伯筆 桃山時代・16世紀

れません。海の香りと松の香りが記憶の中でよみがえり、懐かしさを感じさせ、観る人の心象風景に映る故郷の松林に重なるのでしょうか。長谷川等伯は、能登半島の七尾ななおに生まれました。七尾周辺では、現在も屏風の景色に似た松林と思わせる風景が広がっています。

料紙の紙質や紙継ぎのずれなどから、この屏風が襖絵の草稿であったのではないかと説があります。しかし、その墨色をみると、おそらく当時において、最上質のものであって、入手

できる階層も、天皇家あるいは將軍家周辺のごく限られた人だけに絞られるほどの上質な墨であることがわかります。つまり、単なる下絵ではなく、どこかの建物の部屋を飾っていた襖絵であったものを、現在のような屏風として仕立てたと考えることができます。このように材料や制作意図などに多くの謎をもった作品ですが、あまりに的確な構図と等伯の筆技の高さをみるとができます。この作品は、等伯が私淑した中国の画僧牧谿の絵を日本において究極の地点に到達させた近世水墨画の最高傑作といえます。

収蔵品の中では、とりわけて展示希望のリクエストが多い東京国立博物館のエース・等伯の「松林図」が満を期して三年ぶりの登場となります。ぜひ多くの方々にさわやかな風と光を体感していただきたいと思います。

(事業企画課特別展室 松嶋雅人)

〒110-8712
東京都台東区上野公園13-9
ハローダイヤル 03-5777-8600
開館時間 9:30~17:00
毎週金曜日は20:00まで開館
(入館は閉館30分前まで)
毎週月曜休館
(祝日の場合は翌日)
HP: <http://www.tnm.jp/>